

平成 21 年 6 月 10 日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2006 -2008
 課題番号：18320020
 研究課題名（和文） 死海文書と七十人訳ギリシア語聖書の総合的・学際的研究
 - モーセ五書本文伝承史 -
 研究課題名（英文） Comprehensive and Interdisciplinary Research on the Pentateuch in
 the Dead Sea Scrolls and the Septuagint
 研究代表者
 守屋 彰夫（MORIYA AKIO）
 東京女子大学・文理学部・教授
 研究者番号 70239698

研究成果の概要：

死海文書と七十人訳ギリシア語聖書、更にヨセフスやフィロンの作品を通して、時間的には紀元前 3 世紀から紀元後 1 世紀までの時代における、また、空間的には東地中海世界における、モーセ五書の展開過程を文書資料に基づいて跡付けた。研究参加者はそれぞれの学問領域から一歩踏み出し、学際的協力を構築しながら、ヘブライ語とギリシア語の多様なモーセ五書伝承が現在に伝承されている姿に収斂していく過程を明示することが出来た。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	5,400,000	1,620,000	7,020,000
2007 年度	5,200,000	1,560,000	6,760,000
2008 年度	3,200,000	960,000	4,160,000
年度			
年度			
総計	13,800,000	4,140,000	17,940,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：死海文書、七十人訳ギリシア語聖書、モーセ五書本文伝承史、ヨセフス研究、フィロン研究、ヘレニズム時代史、初期ユダヤ教

1. 研究開始当初の背景

ヘブライ大学の Emanuel Tov 教授が 1990 年代始めに、死海文書公刊の総合編集者に就任して以来 10 数年の間に、死海文書がほぼ全て誰でも接近できるものとなった。その結果、大量の研究成果もその後続いた。一方、ゲ

ッチンゲン大学に結集した研究者に依る七十人訳ギリシア語聖書の本文研究も同時に著しく進捗し、モーセ五書に関しては出版が完了していた。死海文書と七十人訳ギリシア語聖書は、紀元前 3 世紀から紀元後 1 世紀の同時代文書であるが、一部の研究者を除いて

それぞれが異なる研究者群による独立の研究分野となっていた。従って、総合的・学際的研究の必要性が痛感されていた。この両分野の研究は日本においては個別に研究者が散発的に研究発表をする程度で、組織的・学際的研究は行われてこなかったという経緯があった。殊に、死海文書研究に関しては、国際的には日本はほとんど貢献がなかったと言えるような状況であった。死海文書の翻訳計画はあったが、諸般の事情で予定通りには進行しなかった。七十人訳ギリシア語聖書に関しては、新しいゲッチンゲン版を採用して、連携研究者秦剛平が、詳細な注とヘブライ語聖書との対応を注記しながら、翻訳を完了していた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、紀元前3世紀から紀元後1世紀にかけて時間的には同時的に、しかし地理的には離れたパレスチナとエジプトのアレクサンドリアで、相互に独立して誕生した「死海文書」と「七十人訳ギリシア語聖書」に含まれる旧約聖書の創世記から申命記までの所謂「モーセ五書」に研究対象範囲を限定して、紀元前3世紀から紀元後1世紀にかけてのヘブライ語とギリシア語の「モーセ五書」本文の生成過程、伝承過程、歴史的背景、両者の相互影響関係を総合的・学際的に解明しようとするにある。2つの方向からの研究を綿密に統合することによって、両文書資料の実態と特質とを複眼的に照射する。更に、「死海文書」以前の旧約ヘブライ語本文の文書化過程（編集・伝承過程）を可能な限り遡及的に明らかにし、紀元後1世紀以降に正典化される旧約聖書本文と、「七十人訳ギリシア語聖書」のその後の伝承過程と相互連関をも視野に入れ、個別研究の枠を越え出た総合化の最大限の成果を引き出すことが研究目的である。

3. 研究の方法

紀元前3世紀から紀元後1世紀の間の、モーセ五書本文の伝承過程をヘブライ語聖書資料（死海文書）とギリシア語聖書資料（七十人訳ギリシア語聖書）に基づいて明らかにする最初の手続きは、死海文書に関する予備的な研究手続きであり、死海文書を遺したクムラン共同体についての全般的な理解を深め、これまでの研究成果を共有することである。

このクムラン共同体は死海の北西岸のクムラン洞穴を中心に活動し、そこを中心に多数の写本を遺したので、クムラン共同体と呼ばれる。そこでこの研究組織の参加者全員により（1）死海文書を生み出したクムラン共同体誕生の歴史的経緯、（2）クムラン共同体の性格や思想傾向の変遷、（3）エルサレムを中心とした神殿共同体とクムラン共同体との宗教思想上の対立関係、そして何よりも（4）クムラン共同体が遺したモーセ五書の本文上の特質を明らかにすることが最初の共同作業となる。次のもう1つの予備的な研究手続きは、紀元前3世紀以降、徐々に発展してやがて七十人訳ギリシア語聖書に結集していく翻訳聖書の実態解明である。それには、（1）アレクサンドリアのユダヤ人共同体の実態とギリシア人との歴史的・社会的関係、（2）どのような必然性・必要性があってアレクサンドリアで聖書翻訳が行われたのか、（3）出来上がった翻訳聖書がアレクサンドリアでどのような地位を占めたのか、（4）翻訳聖書がアレクサンドリアのユダヤ人・ユダヤ人共同体にどのような影響を及ぼしたのか、（5）翻訳聖書の使用により、アレクサンドリアのユダヤ人・ユダヤ人共同体とエルサレム神殿との関係はどのように変化していったのか、最後に最も重要な事柄である（6）翻訳されたギリシア語聖書本文の特質の解明と、既に失われてしまったヘブライ語聖書翻訳原本への遡及的推論が含まれる。これら2つの手続きは、死海文書に関しては、主として守屋彰夫、関根清三、山我哲雄の3名により、七十人訳ギリシア語聖書に関しては、秦剛平、佐藤研の2名によって推進されるが、両文書の相互関連・総合化を念頭に研究会を通して成果の共有を図る。以上のように、共同研究と個別研究の総合化と成果の共有を通して、日本における研究レベルの向上を図り、更に国際学会での研究発表を通して、成果の第三者による評価を得られるようにするという方法を選択した。

4. 研究成果

（1）最近の研究成果を踏まえた死海文書研究協力体制を構築し、紀元前3世紀から紀元後1世紀までの時代におけるモーセ五書の展開過程を跡付ける試みであったが、おおむねその目的を達成することが出来た。

（2）同期間にエジプトのアレクサンドリアでモーセ五書のギリシア語への翻訳が遂行され、東地中海世界で広範に使用されるようになったいわゆる七十人訳ギリシア語聖書に関する伝承過程についても、ヨセフス、フ

イロン研究者の共同参画により、学際的研究を遂行することが出来た。

(3) 第2年目の夏(2007年8月28日 31日)には、本研究参加者に数名の日本人研究者、海外から死海文書研究、ヨセフス研究、フィロン研究のそれぞれの分野の第一線級の研究者9名も参加した国際研究集会「ヘレニズム時代におけるモーセ五書本文伝承史」を東京で開催することが出来た(日本学術振興会の財政支援により開催可能となった)。

(4) 上記の国際研究集会は有料であったが予想外の多数の日本人聴衆の参加があり、死海文書研究、七十人訳ギリシア語聖書研究への関心の高まりに、更にこの研究分野への若手研究者たちへの学問的刺激として寄与したと言えよう。

(5) それらの成果は、研究代表者と研究連携者の論文とともに、日本学術振興会の財政支援の下に開催された国際研究集会「ヘレニズム時代におけるモーセ五書本文伝承史」に参加した海外からの研究者たちの寄稿論文と一緒に、英語版論文集が Brill Academic Press (Leiden, the Netherlands) から出版される(2009年秋)。日本語訳論文集も出版準備が進行している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計13件)

守屋彰夫、「サマリア五書における本文伝承の諸特徴について」ゲリジム山伝承とモーセの十災を中心に、日本聖書学研究所『聖書学論集』41、119-138、2009年、査読有

守屋彰夫、「原サマリヤ・テキストからサマリヤ五書へ」、日本旧約学会編『旧約学研究』5号、57-76、2008年、査読有

佐藤研、「聖書学は<イエス批判>に向かうか」、『宗教研究』357巻、339-352、2008年、査読有

守屋彰夫、「ユダヤ教神秘主義」、樋口進、中野実監修『聖書学用語辞典』(日本キリスト教団出版局) 366-369、2008年、査読有

守屋彰夫、「ギリシア語旧約聖書」、樋口進、中野実監修『聖書学用語辞典』(日本キリスト教団出版局) 87-88、2008年、査読有

関根清三、「イサク献供物語の哲学的解釈」、日本旧約学会編『旧約学研究』4号、19-55、2007年、査読有

山我哲雄、“The So-called Syro-Ephraimite

War in the Books of Kings and in the Books of Chronicles,” *Annual of the Japanese Biblical Institute*, XXX/XXXI, 31-60, 2007年、査読有
守屋彰夫、「エノクの天界めぐり 不可解の探求」、東洋英和女学院大学死生学研究所編『死生学年報』3巻、71-88、2007年、査読有

秦剛平、“The Abuse and Misuse of Josephus in Eusebius’ Ecclesiastical History, Book 2 and 3,” S. J. D. Cohen and J. J. Schwarts (eds.), *Studies in Josephus and the Varieties of Ancient Judaism* (Brill, Leiden), 91-102, 2007年、査読有

秦剛平、“Robert Traill: The First Irish Critic of William Whiston’s Translation of Josephus,” Z. Rodgers (ed.), *Making History: Josephus and Historical Method* (Brill, Leiden), 417-435, 2007年、査読有

秦剛平、「テル・パスタ (Tell Basta) 考古学的発掘調査のための「約束の地」」、『多摩美術大学研究紀要』21号、101-115、2006年、査読有

佐藤研、「新約聖書と初期キリスト教 『ユダヤ教イエス派』の誕生からカトリック体制の成立まで」、『知の礎 原典で読むキリスト教』(聖公会出版) 37-96、2006年、査読有

山我哲雄、「旧約聖書の宗教はいかなる意味で「一神教」的であったのか」、『一神教とは何か 公共哲学からの問い』(東京大学出版会) 33-78、2006年、査読有

[学会発表](計5件)

秦剛平、“The Legenda Aurea and Josephus,” The Society of Biblical Literature, 2008年11月24日, Boston, MA (米国)

関根清三、「イサク奉獻の物語(創世記22章)を哲学する」、関西学院大学神学部・キリスト教と文化研究センター共催、春季学術講演会、2008年6月4日、関西学院大学

守屋彰夫、“The Pentateuch Reflected in the Aramaic Documents of the Dead Sea Scrolls,” JSPS International Meeting Series: The International Workshop on the Study of the Pentateuch with Special Emphasis on Its Textual Transmission History in the Hellenistic and Roman Periods, 2007年8月30日、国際文化会館(東京)

秦剛平、“Why were Genesis and Exodus Translated into Greek?,” トリニティ・カレッジ(ダブリン大学) 招聘講演、2007年10月31日、トリニティ・カレッジ(ダブリン大学) ダブリン

関根清三、“Philosophical Interpretations of the Sacrifice of Isaac,” International Organization for the Study of the Old Testament, 2007年7月18日、スロヴェニア・リュブリアナ大学

〔図書〕(計6件)

関根清三、岩波書店、『旧約聖書と哲学 現代の問いの中の一神教』、2008年、332

山我哲雄、洋泉社、『図解 これだけは知っておきたいキリスト教』、2008年、158

秦剛平、青土社、『旧約聖書を美術で読む』、2007年、363

秦剛平、青土社、『新約聖書を美術で読む』、2007年、360

秦剛平、青土社、『反ユダヤ主義を美術で読む』、2008年、331

佐藤研、岩波書店、『禅キリスト教の誕生』、2007年、236

6. 研究組織

(1) 研究代表者

守屋 彰夫 (MORIYA AKIO)
東京女子大学・文理学部・教授
研究者番号：70239698

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

秦 剛平 (HATA GOHEI)
多摩美術大学・美術学部・教授

研究者番号：20103715

関根 清三 (SEKINE SEIZO)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：90179341

佐藤 研 (SATO MIGAKU)

立教大学・コミュニティ福祉学部・教授

研究者番号：00187238

山我 哲雄 (YAMAGA TETSUO)

北星学園大学・文学研究科・教授

研究者番号：80230332